運命的な瞬間

原口　長之
●山鹿市立博物館長

昨秋、私の勤めている山鹿市立博物館の入口に「西南之役戦歿者慰霊碑」が建った。山鹿口の激戦地だからである。

この方面における政・薩両軍の対決場は吉次峠、田原坂、そしてこの山鹿口であった。

雨は降る降る人馬は濡れる…の民謡の影響もあって、西南の役といえばすぐ田原坂ということになってしまったが、この三戦場における死傷者三千五百四名中、七百四十一名は山鹿口のものである。即死者だけでみるならば、三百六十五名中の百五十八名は山鹿口である（自衛隊編「新編西南戦史」）。西南の役研究の基本図書といわれる「西南紀伝」は、

山鹿方面と田原方面とは其勇戦健闘の点より観察すれば…一は龍の如く、一は虎の如く、彼は山の如く、此は風の如く…実に十年戦役を通じての一大偉観なりしなり…

といっている。

政府軍の司令長官は陸軍少将三浦梧楼、迎え討つは元陸軍少将桐野利秋、それに協同隊、飫肥隊の面々であった。

戦闘は二月二十六日に始まり、以来死闘がくりかえされた。三月三日午前八時、薩軍は意気軒昂、軍を平野正介、村田三介の二隊に分けて進撃を開始した。平野隊は南関街道を北進、長野原への登り口、車返しの急坂を扼（やく）する政府軍を攻めた。坂の上のざん壕によって俯射（ふしゃ）する政府軍の砲火にはばまれて前進、後退をくりかえした末、ついに車坂を奪い、余勢を駆って日没ごろには政府軍を長野原の下り口、腹切坂の急坂に追い落し板楠へ進駐した。村田隊も鍋田から城原、平山を経由、所在の政府軍を撃破して板楠についた。

翌四日は未明から薩軍は猛攻を始めた。政府軍はすでに浮足立っていた。退却する敵軍を望んで、桐野は思わず莞爾（かんじ）として「我勝てり」と眉を開いた。

今だ、この機を逸せず一路、南関を突破、北上の道を開かんと進撃の命令を下そうとした。そのときである。田原方面へ派遣してあった斥候（せっこう）がとんで帰ってきた。

「報告、田原坂の友軍が大敗しました。」斥候は無念さに顔をひきつらせて報告した。

さしもの桐野も凝然として腕を組んだ。南関は指呼（しこ）の間にある。進むべきか退くべきか。沈思数刻、「田原坂が破れた以上、本隊だけが敵中に孤立すべからず、撤収すべし」諸隊は追撃する政府軍を振りきりながら山鹿へ帰った。

ところがである。この斥候の報告は全くの誤報であった。この誤報によって勝機は永久に失われた。

歴史には運命的な瞬間があるといわれるがまさにそれがこのときであった。

「新編西南戦史」は、

「兵力においても薩軍が優勢であったわけで若し薩軍が引続いて真面目の攻撃を加えていたら南関に進出することは大して問題はなかったであろうし、そうなれば戦勢は意外な発展を遂げ薩軍にとって思わぬ幸運が約束されたかもしれない」

と九仞（きゅうじん）の功を欠いた薩軍を惜しんでいる。この斥候が誰であったか知るよしもない。

古城堀端・羅漢さん

呉竹　扇弥
●日舞教授

ハスの花が咲く頃になると、私は古城堀端へ出かけたくなります。季節は夏の盛り、強い日射しのなかに青々とした葉が繁り、白や淡い紅の色をした花が涼し気な顔をのぞかせています。とはいえ、今、その光景は残念ながら望むべくもありません。私はもう久しくハスの花を見たこともなく、古城堀端へ出かけることもなくなりました。堀端のハスの花、それは私の幼い頃の記憶のアルバムに残るのみです。

あれは昭和二十八年の大水害以来でしょうか。古城堀端のお堀が埋め立てられてしまった時、私はずいぶん寂しい思いをしたものです。私が生まれ育った古城堀端、それは芸者さんが往き交い、三味の音が流れ、料亭や置屋が軒を並べていた華やかさとともに、お堀の水、苔むした石垣、小舟、ハスの花…それらがなくてはならぬものだったのです。

私は石垣をよじ登り、ハスの葉の陰に身をひそめ、小舟にのって叱られ、そんなことをしながら泥んこになって日暮れまで遊んでいました。私の生家である置屋（現在の福田病院の隣あたり）、その娘にしてはオテンバすぎると思われるかもしれませんが、当時は男の子も女の子もそんなものでした。それに、どちらかといえば、ひとりで遊ぶ方が好きだった私にとって、石垣に囲まれたお堀の中は一種の〝別世界〟であり、絶好の遊び場といえました。今でこそ私は踊りの看板を掲げていますが、子供時代は芸事が嫌でたまりませんでした。余り身近な環境にいると、その世界にかえって反発を感じるものなのかもしれません。私は〝別世界〟のお堀周辺で毎日を過しました。ハスの花が咲くと夏になり、結んだ実を炊いて食べるのが秋、やがて冬が訪れ、レンコン堀りのおじさんたちがやってきて、一年が過ぎていくのでした。お堀から〝遠征〟することもありました。金峰山から五百羅漢へもおにぎり持参で出かけたものです。小学校の先生に黒板用のムチをプレゼントするのだといって、青竹を必死に堀り返したのも幼い頃の思い出です。五百羅漢では持ってきたおにぎりのご飯の粒を羅漢さんの顔に貼りつけたりもしました。羅漢さんでは大人になって、おもしろい体験をしました。あれほど嫌だった芸事ですが、結局は「この道しかない」と定めて、市川小太大師を頼って上京、修業に励んでいた昭和二十三年頃のことです。友達が何人か集まると「羅漢さんをしましょう」ということになるのです。

羅漢さんがそろったら
そろそろ回わそうじゃないか
ヨイヤサのヨイヤサ

輪になった一同が、その掛け声と同時に、それぞれで百面相をするわけです。同じような表情、ポーズだったら負けという単純な遊びですが、これをすると五百羅漢から熊本へと望郷の念がつのったものでした。羅漢さんの表情は様々です。遊びもそこから出たのでしょうが、その様々な表情には必ずや知った人、懐しい人の顔を発見するだろうと言われております。

今、こうして、何かの拍子に昔を思い出すとき、羅漢さんの表情にだぶって、恩師や亡くなった母の顔、お世話になった人たちのことがしのばれてなりません。そして、ハスの花咲く古城堀端のことも…。